

しろしろい鳥とり

むくはとじや
椋鳩ぶん

かじやまとしお
梶山俊夫えん



あとがき

棕 鳩十
はせとらう

私は、大分県の、九重の山々を、歩きまわっていました。谷間の小さな甲の、森かげに、目にしみるあかさで、ボケの花の咲いている農家がありました。心ひかれて、その農家を訪ねてみました。ボケの花だけが、はなやかに咲いているだけで、農家は、あき家になっていました。農業だけでは、生活ができなくなつて、いづこへか、去つていった農民の家であつたのでした。

心に、ささるような痛みを感じて、あれはてた庭に、私は、たたずむのでした。

この同じ、谷間の里で、私は、ひとりの老婆と知りあいになりました。指も、ぼくぼくと節くれだち、顔にも深いシワがきざまれ、労苦にたえぬいて生きてきた老婆のようでした。けれど、たいそう、人のよい、不思議に、暗いかげのない老婆でした。その老婆は、この地方に伝わる「朝日長者」のはなしをしてくれました。

私は、九重の山々を、十日ばかり歩きまわりましたが、その間中、老婆の土俗的な、かたりくちとともに、「朝日長者」の物語が、私の心を去来するのでした。

この「白い鳥」は、あの時の老婆のかたりくち、「朝日長者」の物語、あき家の赤いボケの花、そういうものが、まじり合つて、私の心の中にかたまつた、民話調の「はなし」なのです。

おはなし名作絵本 13 白 い 鳥

文・棕 鳩十 絵・梶 山 俊 夫

発行＊昭和48年3月30日©

写真植字＊誉工房株式会社

発行所＊東京都新宿区須賀町5 ポプラ社

製版＊株式会社 美術版画社

印刷＊名古屋印刷株式会社

製本＊大成紙工業所

落丁・乱丁本はいつでもおとりかえいたします

8793-057013-7764

白鳥
しる
棕鳩十
はと
う
ぶん
梶山俊夫
かじやまとしお
え



おやしきの 東がわに くらが 七つ。
西がわにも 七つ。北がわにも 七つ。
長者さまは 二十一も くらを
もつておられたと。
二十一の ぐらの 白かべに 朝日が
あたると、ぐらの 白かべは 金色に
ひかり、夕日が さすと、あかあかと
もえた。



くらに かこまれて 長者さまの
おやしきは あった。ほんに お城しろのように
りっぱな おやしきじゃった。



長者さまの

お城しろのように



長者さまは、この国 一ばんの
お金もちじゃった。

けらいが 百人。めしつかいは 五百人も
おった。

長者さまの 南の門が、ぎーい
ぎぎーいと ひらいた。門は 鉄の門。

おもい おもい 鉄の門じゃった。

その門が 大きく ひらかれた。

長者さまの おでましじや。

長者さまの おかごの まえに、やりを

もった けらいが 三人。うしろに 三人。

弓をもった けらいが、やつぱり まえと

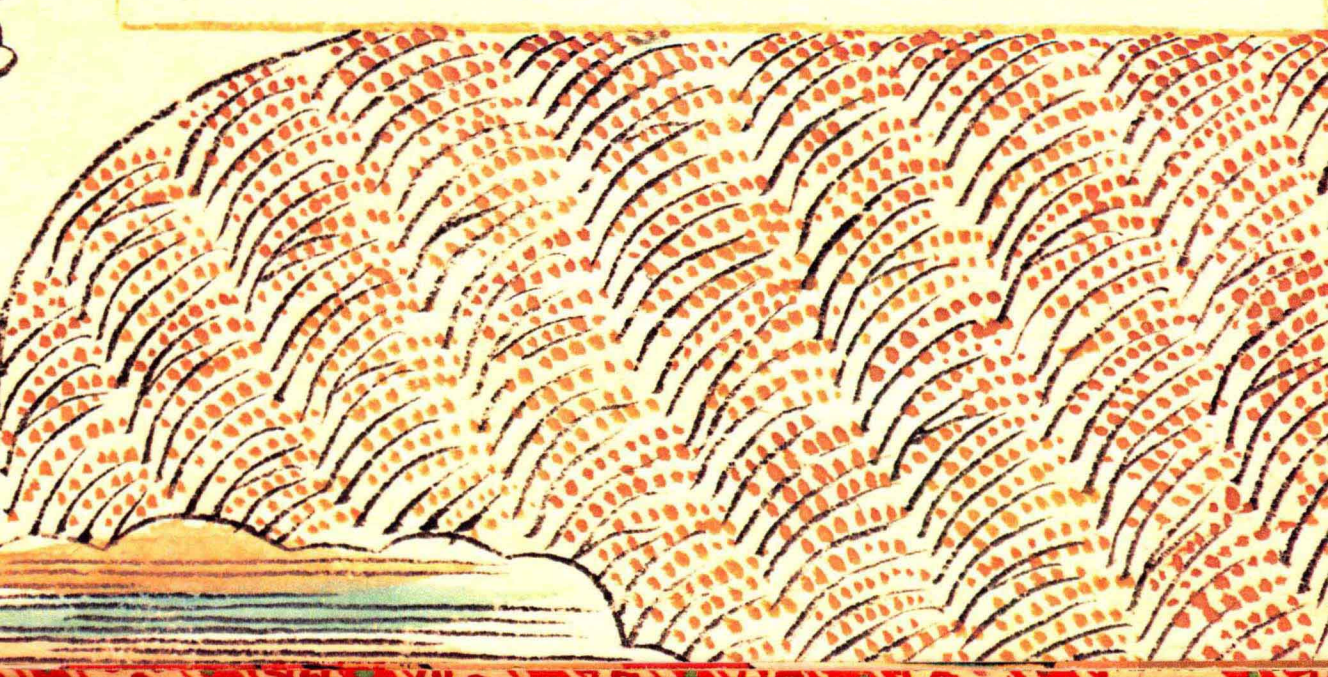
うしろに 三人ずつ。一ばん まえと

うしろに、むちを もった 男が、馬に

のつて 五人ずついた。

いくさにでも でかけるような

たいそうもない おでましじや。



けらいたちは むねを はって、
のつしのつしと 大いばり。

長者さまの おでましの ばしよは、
なんとまあ、これは たんぼじゃった。

長者さまの たんぼは

ひろいのなんのつて……、朝日が

あがつたときから あるきだして、夕日が

しずむまで あるきつづけても、まだまだ

つきぬけることは できなんだと。

たいそうもない ひろい たんぼじゃった。

とりいれの ときじゃった。

みわたすかぎりの たんぼの いねは、

金色に みのつておった。

秋風に 金色の いねは、ざわりんこ

ざわりんこ おもたく ゆれとった。

たんぼでは 五百人の めしつかいたちが、

せつせと いねを かっておった。



やがて 長者^{ちやうじや}さまの 二十一^{にじゅういち}の ぐらは、
お米^{こめ}の たわらで いっぱいになつて
しまうことじやろうよ。

「おお、よう みのつておるのう。
うつわつはあはあ。」

長者^{ちやうじや}さまは おかごの なかで
おわらいなされた。

「みのりましたわ。みのりましたわ。
へっへっへっ！」

けらいたちも 声^{こゑ}を あわせて わらつた。





ひろい たんぽには、あちこちに
みはり台^{だい}が つくつてあつた。
長者^{ちやうじや}さまと けらいたちは、みはり台^{だい}に
のぼつて あたりを みわたすのじゃつた。
ひろい たんぽでは、男^{おとこ}も 女^{めな}も 老人^{ろうじん}も
子どもも はたらいておつた。わきめも
ふらずに よう はたらいておつた。

うん うん うん。

長者^{ちやうじや}さまは ごまんぞくなのじゃ。

二^にばんめの みはり台^{だい}に のぼった。

けしからぬやつが ふたりおった。

わかい男^{おとこ}と わかい女^{おんな}じゃった。

みんな わきめもふらずに よう

はたらいておるのに、こやつどもは

木^きかげに やすんでおるのじゃ。

わかい女^{おんな}は 赤^{あか}んぼうを だいておった。

わかい男^{おとこ}は そのわきに しゃがんどった。

ふとどきな やつらじゃ。

「ばっばっ、ばかものめ！」

長者^{ちやうじや}さまは はらをたて、 まっかな

かおして どんった。

その声^{こゑ}を きくと、 むちを もった 男^{おとこ}が

ふたり、馬^{うま}を はしらせていった。

わかい男^{おとこ}と 女^{おんな}のほうに はしらせていった。



「えーい！ この なまけものめが！」

馬の上から ピシッ！ ピシッ！と、

ふたりのものを うちすえた。

ちかくにいた めしつかいたちは

あわてて、

「もうし、赤んぼうが ねつをだして

おりますのじゃ。おゆるしくださりませ。」

と、わかい ふたりを かばったのじゃが、

「えーい。よこから つべこべ もうすな！」

口を はさんだものたちも、あたまや

せなかに、むちの おみまいを

うけるのじゃった。

おどろき おそれ、みんな 石のように

だまりこんでしもうた。

わかい男と 女は、五十ずつ

むちうたれた。

なまけものには 五十のむち。これが

長者さまの おきてだったのじゃ。



赤んぼうは ほんとに びょうきだった。

高いねつを だしているのじゃった。

わかい男は はを くいしばって

いたみを こらえ、いねを かりはじめた。

わかい女は、びょうきの 赤んぼうを

おんぶして はたらきはじめた。ぼろりん

ぼろりん、なみだを ながしながら……。

五百人の めしつかいたちは、五十人ずつ

十かしよに わかれて くらしておった。

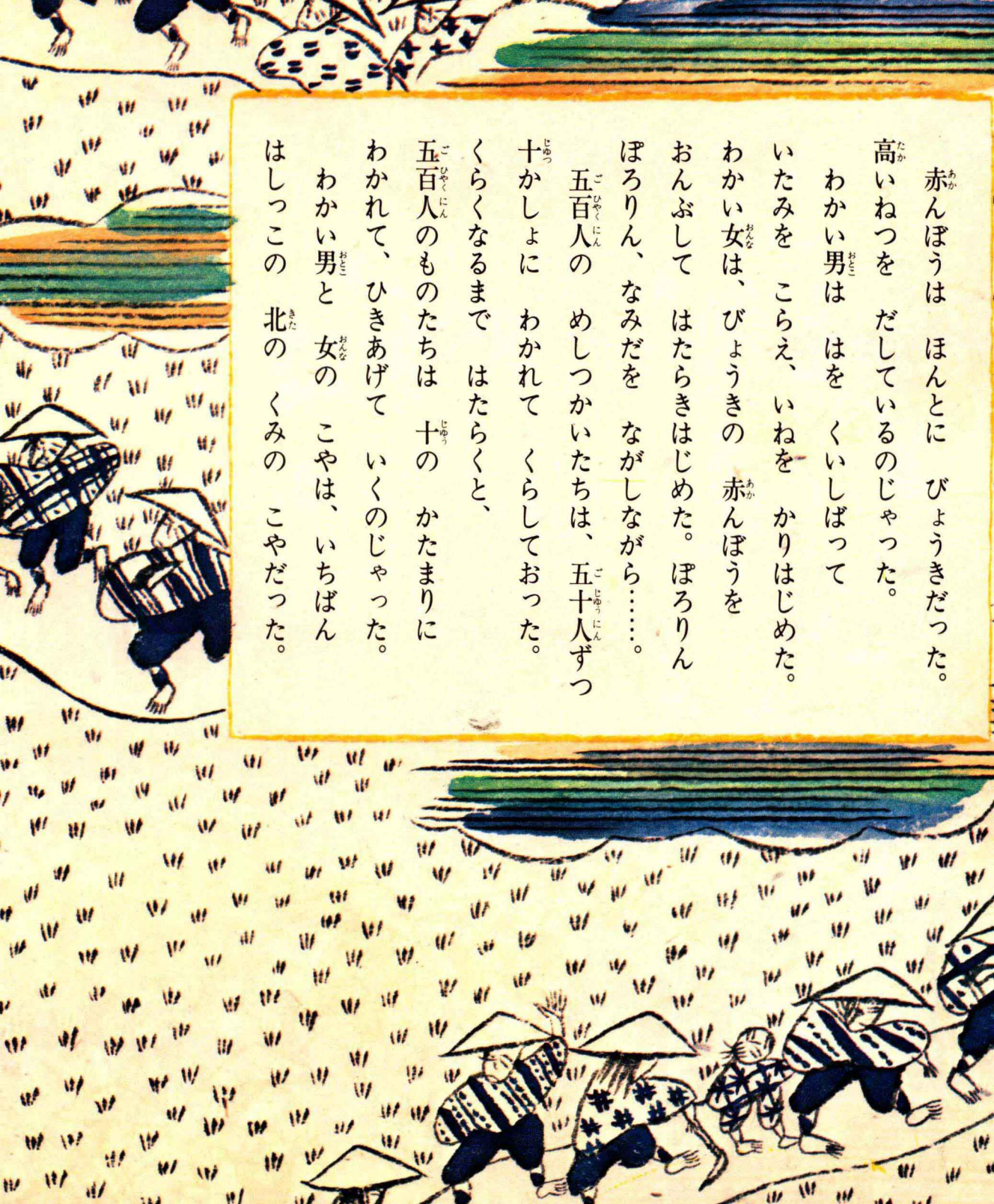
くらくなるまで はたらくと、

五百人のものたちは 十の かたまりに

わかれて、ひきあげて いくのじゃった。

わかい男と 女の こやは、いちばん

はしつこの 北の くみの こやだった。



みんな たくたに つかれておった。

ごはんが すむと、そのまま ごろんと

ころがつて、まるたんぼうのように

ねむりこけて しまうのじゃった。

どの こやからも、ごいすか ごいすか

いびきが きこえておった。

目を さましておるのは、わかい男と

女の ふたりだけ。

赤んぼうを おんぶして あす一日 日に

てらされたら、ねつの 高い 赤んぼうは

しんでしまうじやろう。

わかい男と 女は、長者さまのところから

にげだすことにした。



赤んぼうのおしめを ふろしきに
つつみ、そばのこを ふくろに いれて、
こしに ぶらさげておったら、となりの
ばっさまが かべの やぶれから ぬーんと
かおを つきだした。

こりやまあ こまったことに なったわな。

「おめえら、にげるつもりかの！」

ばっさまは 目玉を ぐるりとした。

ふたりのものは しょうじきに いった。

「うん、そうじゃ。ばっさまよ、

どうぞどうぞ みがしておくれや。」

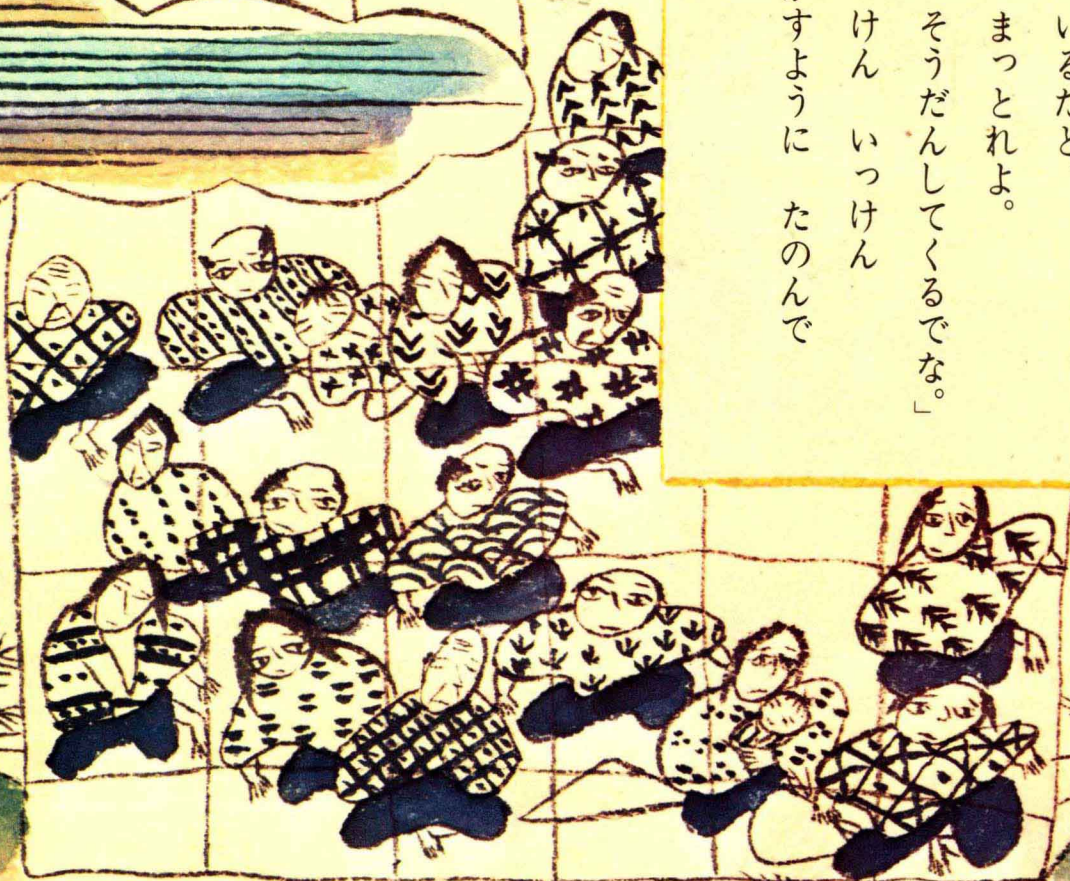
ばっさまは、よぼん よぼんの

としよりじゃったが、やさしい人だった。

ちえも あった。



「ああ いいとも。にげるにや たくさんの
人の たすけが いるだど。
しんぱいせんで まつとれよ。
こやのしゅうと そうだんしてくるでな。」
ばっさまは、いつけん いつけん
まわって、力を ちから かすように たのんで
まわった。



みんな きもちよく ひきうけてくれた。

ばっさまは ひつかえしてくると いった。

「こんやは だめじゃ！ あす

ひるのうちに にげるのじゃ。」

「えっ、ひるま にげるのだって……。」

「ひるまのほうが てだすけしやすいからよ。」

わかい ふたりは、ばっさまの

いうとおりにした。

夜が あけると、ばっさまに 赤んぼうを

たのんで、はたらきに でた。なにくわぬ

かおで、ふたりは いねを かっておった。

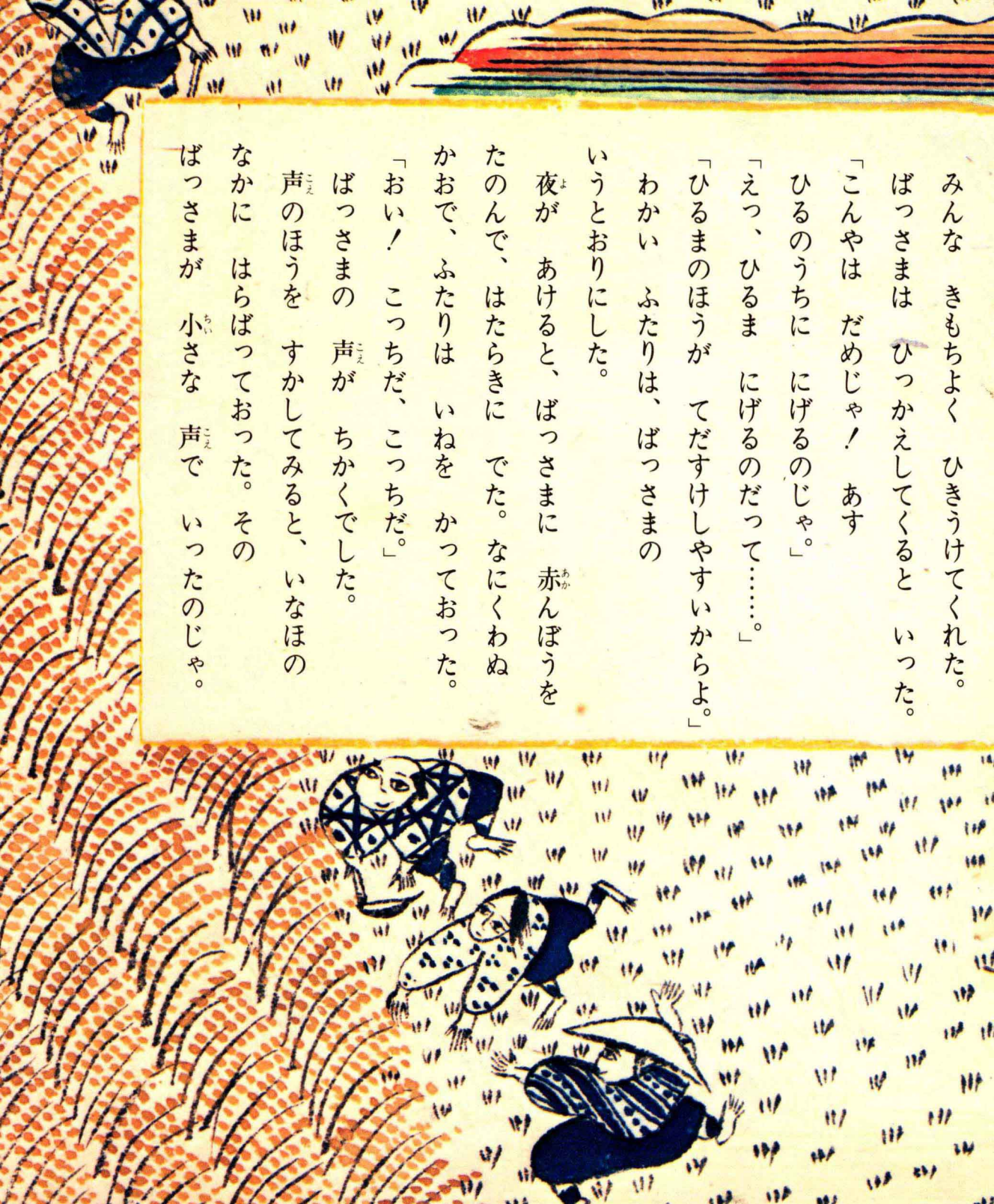
「おい！ こっちだ、こっちだ。」

ばっさまの 声が ちかくでした。

声のほうを すかしてみると、いなほの

なかに はらばっておった。その

ばっさまが 小さな 声で いったのじゃ。



「こうら、ようきけや。いねを かりながら
いなほの なかに すべりこむのじゃ。

すべりこんだらのう、はらばつて

わしの あとに ついてこいや！」

ばつさまの いうとおり、いなほの

なかに うまく すべりこんだ。ばつさまの

あとに ついて、ずつこら ずつこら

はらばつていったと。

ところが、いねは がサリ がサガサ

ゆれたのだわ。

それを みつけた みはりのものが、

かバかかバかと、う馬を とばせてきた。

